

## 特別ニーズ教育のためのホール・スクール・アプローチの検討：

2014年制度改革以降を対象として

青木栄治（筑波大学大学院）

本発表の目的は、イギリス（本稿ではイングランドを指す）におけるホール・スクール・アプローチ（Whole School Approach: WSA）について、分離（segregation）への積極的な意義づけと、「排除」（school exclusion 或いは exclusion）への対応、という二つの文脈から検討することである。

WSAは「従来の分離教育を問い直し、特別なニーズ教育のあり方を模索する動き」の中で生まれた理論および実践（窪田, 2005a, p. 275）である。判定書（statement）制度が導入された1980年代より、こうした判定書を持たない生徒に対する対応のあり方はWSAとして模索されてきた。そして2014年の制度改革によって改められたコード・オブ・プラクティスの中では、WSAが一つのキーワードになっていると考えられる。

WSAを巡っては、通常学級とは異なる場での対応と分離との関係性がこれまで議論されてきた。WSAは「90年代に行き詰る結果となり障害児教育の表舞台から姿を消すことになった」（窪田, 2005a, p. 285）と評される。WSAが行き詰まりを見せた原因は、「分離」の捉え方にあった（窪田, 2005b）と考察されている。すなわち、通常学級以外の場で付加的な支援を行う『分離』的アプローチはWSAの一環として意義を持つのであり、インクルージョンが問題とすべき「分離」には含まれないことを指摘している。

こうした分離という観点に加えて、「排除」の観点が存在することが新井（2011）から想定できる。「排除」の対象となりうる、行動上の困難を抱える子ども（children with behavior difficulty）への着目からWSAが再び注目されたことが主張されている（新井, 2011）。その背景には、梶間（2000）が指摘するような、1990年代のイギリスでは、「排除」や怠学（truancy）などの問題行動が増加したという事情があると考えられる。

以上を踏まえ本発表では、分離と「排除」という二つの観点から、イギリスにおける特別ニーズ教育のためのWSAについて検討を行う。

### 主要参考文献

- 新井英靖（2011）『英国の学習困難児に対する教育的アプローチに関する研究』風間書房
- 窪田知子（2005a）「イギリスにおけるホール・スクール・アプローチに関する一考察：特別な教育的ニーズ・コーディネーターの役割と課題を中心に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』51：pp. 275-289
- Skipp, A. and Hopwood, V. (2017) SEN support: Case studies from schools and colleges (Research report) (DFE-RR714)